

ミロコマチコ／咲くやこの花インタビューvol.16

ミロコマチコ(みろこまちこ)【平成 30 年度 美術部門[画家・絵本作家]】



じゃーん、ギロリ、ガルウルウ……。そんな効果音が聞こえてきそうなほど、画面いっぱい生命の輝きを描き込む画家・絵本作家のミロコマチコさん。彼女が描く動植物たちは躍動感に溢れ、物語がはじまる気配に満ち満ちています。1981 年、大阪府枚方市出身。大学時代は人形劇団に所属し台本などを担当。児童文学への興味から京都精華大学人文学部へ進学。その後、絵本アートスクール梅田(現、アートスクール大阪)へ進み、2 年間絵本の制作に触れました。独学で絵を描き始め 2004 年、画家として活動開始。2012 年、絵本作家デビュー作『オオカミがとぶひ』(イースト・プレス)が第 18 回日本絵本賞大賞を受賞、一躍脚光を浴びました。2014 年、飼い猫がモデルの絵本『てつぞうはね』(ブロンズ新社)で第 45 回講談社出版文化賞絵本賞に輝くなど、受賞歴多数。その他、装丁、ポスター、百貨店のウィンドウ・ディスプレイまで活躍の場は広く、2018 年公開の映画『万引き家族』では題字を務めました。サイン会などでは「意外と小さいんですね」とファンに驚かれることもしばしば。小さな巨人とも言うべき彼女のパワーの源泉はどこにあるのか。「平成 30 年度 咲くやこの花賞」授賞式当日、楽屋に彼女を訪ねました。

©取材・文・撮影＝石橋法子

「引っ込み思案の私にとって、絵は唯一のコミュニケーションの方法です」

この度は、30 年度「咲くやこの花」美術部門での受賞おめでとうございます。

賞をいただくのは嬉しいですけど、毎回「まさか私が!？」とやっぱり恐縮するもの。一瞬辞退の文字が頭に浮かびました(笑)。若いころは「やったー！」と無邪気な感じでしたが、年齢を重ねるごとに、えらいことだなと重みを感じています。



大阪文化の次代の担い手としての期待を込めた賞ですが、大阪にはどんな印象をお持ちですか。

コミュニケーションの軽やかさがいいなと思います。人と人との垣根があまりないというか。母親世代はとくに電車で隣り合わせた人とも「昔からの友達やった？」というぐらい話し込んだりしますよね。エレベーターに乗っても、「どこまで？」と自然と知らない者同士がやり取りしたり。道で落とし物をしたら、側にいた 5、6 人ぐらいの人たちが次々に「落ちたで一」と声を掛けたり。そういうことが他の地域へ行くと、当たり前のことではないんやなと気づいたりします。

ご自身も垣根がない方ですか。

そもそも引っ込み思案なので、自分から話し掛けることはないですけど、声掛けられるぶんには大丈夫。受け答えできます。

以前、「凄まじい引っ込み思案」と書かれたプロフィールを拝見し、とても印象に残っています。

今でこそ取材とかでもお話できますけど、小さいころはとにかく一言も言いたくなかった。「トイレ行きたい」とかも言えないし。だからいつもギリギリ。首を縦か横に振るしかできなかった。喉元で何かが詰まったように声が出せなくて、自分でも謎なんですけど。



困ったこともあったのでは？

一度帰りの電車賃を持たずに電車に一人で乗ったことがあって。小学校3年生ぐらいの時かな。駅の構内でずっと黙って立ってたら駅員さんに「迷子？」と聞かれて、でも答えられなくて涙が出てきた。そのときは親が電車賃を持たずに出たことに気づいてくれて、迎えに来ました。

現在の勢いある画風には、そんな当時の言えなかった思いも反映されているのかなと想像しました。

それは、今になってちょっと感じます。当時の鬱屈した何かが「絵だと出せる！」みたいなことだったんだと思います。(表現方法を)見つけられてよかったです。

小学生のころは、美術の時間はお好きでした？

好きでしたけど、自分は絵のひとじゃないんだなと思い込んでいました。当時一番仲良かった友達が、ものすごい絵が上手くて。常にその子は誉められていたので、自然と「私は絵のひとじゃないのかな」と、好きだやけど離れてしまった。その後は、年齢とともに興味の対象も変わってきますし、音楽とか全然違うことをやってました。



音楽をやるとは？

中高は「ギター・マンドリン部」という部活でマンドリンを弾いていました。高校でも書道、音楽、美術の選択科目は音楽を選んでいたし、それこそ美術に触れたのは中学時代まで。一回遠ざかってたんですよね。すごい覚えているのは、小さいときに「マチコちゃんの絵は分かん」と言われたことがあって。犬描いても熊と言われたり。そういうのって、案外傷付いていました。多分そこから勝手に「違うもの」を探し始めたというか。好きは好きやったんですけど。

大学では児童文学を学べれます。こういった興味から？

中学2、3年生の頃に人形劇がすごい好きになったんですよ。そこから児童文学に興味を持ち始めて。大学では絵本の制作ができると勝手に思っていたのですが、実際は歴史を学んだり批評をする授業だったので、「あれ？ やりたかったことと違うぞ」と。



それで、大学に通いながら人形劇団に入団し、4年間活動されたのですね。

プロとアマチュアの間のような感じで、高校時代からの同級生たちと人形劇団(大阪市こども文化センターに所属)を作って、保育園で人形劇をしたり。その時にはもう色々作りたくなっていたので、台本を書かせてもらったりしていました。でも4年経ってふと私は引っ込み思案だったなと改めて気付いて。人前に出るのは結構辛くなってきた。単純なので、好き＝人形劇団をやる、になってたけど、やってみたら案外自分には合っていないなと。そこから、絵本を描きたいと思い始めて、試しに描いてみたら「絵ってめっちゃ面白かったんや！」と思い出しました。

どのあたりに面白味を感じられたのですか。

勝手に遠ざけていたけど、それが唯一自分を出せるコミュニケーションの方法やったんやと思います。しゃべるより絵で会話する。じつは私こうやねん、みたいな。それが今でも私が絵を続けている理由かもしれないなと思ったり。



絵の方が雄弁なんですね。

語れているかは分かりませんが。私の表現方法は絵なんですね。小さい頃から口に出せなかったこととかを、語ってくれるのは絵かもしれないですね。「好きなもん見つけたー！」と嬉しくなった。そこからは、あまり迷わずにずっと絵を描いてきました。

「本はめっちゃ読まれた。それで絵本のリズムが身に染み付いたんだと思う」

絵本は言葉でも表現しますよね。学生時代は国語がお好きだったとか？

そんなに好きじゃなかったです。本はめっちゃ読まされてましたけど。父親の方針で、とにかく「本を読むことは大事や」と昔から言われていて。お小遣いも読書制。1冊いくらかは忘れましたけど、10円ぐらいとして、10冊読めばその月のお小遣いが100円貰える。いっぱい飛ばし読みもしましたけど(笑)、でも自分で選んだ好きな本だと面白さに気付けたし、絵本のことばのリズムとか、ページをめくる運びとか、多分体に染み付いていたんだと思います。私は親戚のなかでも結構年下だったので、みんなのお下がり全部うちが集まってくるような環境でした。いま思えば本当に恵まれていて、本や絵本がいっぱいあったんですよ。『はらぺこあおむし』『じごくのそうべえ』とか、ボロボロですけど今でも家にあります。

絵本の面白さに気づいてからは迷いなく？

人形劇をやめてからは迷いなかったです。深刻に考えない性格だったのも良かったと思います。本当に将来の心配とか、したことない。「絵本を作りたい」という思いだけで、ここまで来た感じです。



実行力がありますよね。大学在学中に絵を描きはじめて2、3年後には、自宅の倉庫で展覧会を開催されました。

24歳ぐらいの頃ですね。展覧会をしたいと思っても、ギャラリーの借り方が分からない。でも、家やったらタダでできると。考え無しなので、いろいろと無謀なことができました(笑)。DM作ったり、看板をドアに貼ったり。結局自宅には一般の人は入れないので、ただただ友達が家に遊びに来るだけという。やりたくてしょうがなかったんでしょうね(笑)。「この絵はね…」と一所懸命説明した記憶はあるけど、後は普通にしゃべって遊ぶ。展示の第一歩は、そんな感じでした。

「なるべく大きな気持ちで絵を描いて なるべくときどきする心でおはなしを作って 生きてゆきたい」。ミロコマチコさんの公式 Web サイト(<http://www.mirocomachiko.com>)の「わたし」の欄にある言葉です。やはりときどきしないと、ツマラナイ？

自分のいま考えてる事とかを出したいんですけど、それが予想もつかない形になったりする方が面白い。(キャンバスが)大きいと自分の手の届く範囲や視線が限られていて、見えないじゃないですか。そこから引いて遠くから見ると、変な形になってたりする。そしたら「わっ、面白い！」と思ってしまうんですよね(笑)。



自分とのセッションみたいですね。

そうですね。絵以外だと全然慎重やし怖がりなんで、なかなかできないですけど。絵やと自分を出して楽しめる。

やはり、動物たちの眼を描くときは気合いが入るものですか？

入りますね。なんか眼で全然印象が変わるから。そこだけはちょっと、自分の意識に寄せたいのかも。鋭そうにしたかったのに、ふにゃふにゃな眼になってると思ったら、「嫌や」となって描き直したりするので。眼はいろいろ世界を変えるので、気合い入れますね。

アイデアを練る作業、作画、展示、ワークショップまでどの作業が一番好きですか。

やっぱり(アトリエに)こもって描いてるのが一番好き。幸せやなと思います。

お仕事＝幸せですね！

そうなんですよ。ありがたいなと。遊びの延長みたいに毎日絵を描いて、生活しているなんて。「さあ、仕事だ、絵を描くぞ。」なんて、いい仕事です。



創作には生みの痛みもあるのかなと……。

それもあるんですけど。それって、何も手を動かしてないときで、手を動かすと失敗していても描いてるときは苦しくない。それがすごい不思議なんですけど。でも、いつもすぐに忘れて頭の中でもがいてます。「あ、そやそや私は描かな苦しいんねん」と後から気付く。だから無駄に苦しんでる時間は結構あるんですけど（笑）。

（笑）。また絵本には、物語を生み出す難しさもありそうです。

難しいですけど、それがしたいんですよね。うんうん唸りながら「なんか絵本でいい表現ができへんかな」っていつも考えてます。

絵画と絵本では、目指すゴールが違ったりしますか？

一枚の絵だと「これが描きたい！」と全部全力みたいな感じ。でも絵本には流れとか、ページをめくる面白さがあるので。次のページで驚かせようと思ったら、直前のページではガマンしておとなしくしようとか。あとはやっぱり言葉が大事。音の表現が面白い絵本が小さい時からめっちゃ好きやったんですよね。音を繰り返し、自分で口に出して言うのも好きだった。今でも音の運びはすごく重要。リズム良く進みたいという気持ちはすごい強いです。



また、ミロコさんにとって子供たちとのワークショップはどのような位置付けですか？

子供ってあんまり私のことを気にしてなくて、だから環境をつくるだけ。でっかいキャンバスに向かって絵の具まみれになって描ける機会ってそうそうない。家は汚したらアカンし。ワークショップでは「今日は何をしてもいいねんで」という機会を作っているだけ。普段できないことが出来た方がめっちゃうれしいなと思っていて。結果はどうしてもよくて過程が大事。人のとこまではみ出して描いてもいいし、走り回りながらも、寝転がりながらも塗ってもいい。色んなやり方があるから。

手で絵の具を塗ったり、そこを爪で引っ掻いたり、チューブのまま絵を描いたり……。ミロコさんの普段の創作方法を目の当たりにした、子供たちの反応は？

はじめは「何でそんな汚いことするん？」「こぼしたらアカンねんで」とか言われるんやけど。でもね、絶対内心では「やってもいいんや…」ってなってる。実際やってもらうと子供たちはめちゃくちゃ喜ぶ。学校できれいにはみ出さずに塗りなさいと教わるのもいいですし、でも私は「ミロコさんみたいな変な人もおったな」と、覚えて貰ってるだけでも良くて。



方法はひとつじゃないというのは、「間違ってもいいよ」というメッセージにも聞こえます。

そもそも絵の中では、間違いないって無いというか。小学生の頃、「壁を塗りなさい」という授業があつて。私は白いなと思ったので白を塗って持っていったら、先生から「こういう壁じゃないでしょ」と言われて。訳が分からないまま机に戻って、今度は適当に筆をびよんびよんびよん遊ばせて描いて、諦め半分で持っていったら、「いいやん！」。ということは…、適当でええなと(笑)。ああそうか、という感じになった。この適当を真剣にやればええなと。何が正しいとか無いんちゃうかと。だから私の場合は「何でもええよ」っていうのが役割かなと(笑)。

やはり、子供を対象にしたいですか。

おとなとやってもいいんですけど、教えてもらおうとしてくるから(笑)。自分でもビックリするぐらい、ノウハウとかないんです。下絵通りに描けたことは1回も無いですし。こう描いたら、こうなるやろうと思った通りにならない。独学で描いてきて技術がないことが、かえって良かったのかなと。想像ができないですよ。ね。ぼんやりした完成図があるんですけど、そうならない。

えっ！　じつは頭のなかの完成図と仕上がりは、違うのですね!?

「こうなったかー！」と一人で面白がってます(笑)。あつ、ええやんって。遠近法とかいろいろあるんでしょうね。以前、イラストの仕事で「斜め上から見下ろしたビル群を描いてください」と注文されたことがあつて。でも無理で。「ちょっと見本描いて貰えませんか？」と先方に言ったぐらい。そしたら、「あー…、違う絵でいいです」と言われました(笑)。だから私はイラストの仕事はしているけど、イラストレーターと言える資格はないと思っています。



「動物たちは生きることシンプル。私も描いてるときは生き物らしくなれる」

絵のモチーフはデビュー当時の自画像から動植物へと移る中、最近はどんなものに興味がありますか。

最近、海を気にしています。自分の中にある世界と外にある世界はそう変わらないとか、この隔たりって何かとか考えたり。以前海に行った時、私は泳げないのでただ首まで海に浸かってぼんやりしてました。海の中ってあらゆるものがひしめいていて、今そこに浸かっている私の体もそれらと違いがないなと思って。私の体の中でも物凄い量の何かがうごめいているし、それって宇宙みたいなことでもあるなと感じることができて、『からだうみ』(2017 年)という展覧会も開催しました。色んなものがそれぞれ動物みたいに生きていて、「がんばれ、がんばれ！」って無意識に動いてる感じがして。ひとりの体やけど、色んな生き物がいっぱい集まってできてるみたいやなとか思ったら、この世界みたいやなと思ったり。なんか不思議やなと。



いままでにない発見、感覚でした？

そうですね。今は動物そのものという絵はあまり描かなくなっています。自分の想像する生き物とか。生き物は生き物でも、心臓が生き物になったらこういう感じかなというものを描いている。やっぱり、「生き物」とか「生きること」に興味があるんやろうなと。動物たちはシンプルですよ。生きることのために生きているみたいな気がして。私はしょうもないことばっかりに悩んでいて。そんなん大事ちゃうやろ、ということに捕らわれすぎてると。「私は生きてるやろうか？」とか、本質みたいなことがどんどん出来なくなっているような気がして。だから懂れて、動物や植物を描いたり。「生きてることを考えること」が好きなんやろなと思います。絵を描いてるときは私自身も生き物らしいんですよ。なんか集中しているから。



覚醒する感じ？

どうなんだろう。でもその時はいろんなことが気にならなくなるので。それこそ、間違えたらあかんとか。例えば、東京とかみんなすごい歩くのが速い。大阪人も速いけど、改札を通るときにキンコン！と止まったら、後ろの人に舌打ちされたり、大声で叫ばれたりしたことがある。それから絶対間違えられない。チャージもできてるし大丈夫とか気にしている。そんなん「どうでもええやろ」ということばかりに、頭がいっぱい。でも絵を描いてるときは、そういう「やったらあかんこと」というのがあまり無い。一番自分のやりたいことができる。ほかではあまりのびのびできない。気にしいやったりするので。

2019 年 3 月に東京で開催する展覧会『貝殻は金色のにおい』では、今のような気持ちを反映した内容になりそうですか。

そうだね。その辺の石ころとかも自分と一緒に人間みたいな感じ、とか。日本にも精霊みたいな伝説ってあるじゃないですか。ああいうのって本当にいるなと思う瞬間があつて。例えば、お花がパカッと咲いた瞬間、そこに親指姫のようなものがあるように見えるとか。あの木にはこんな妖怪が宿っているのよみたいな気持ちとか、何か分かるなと。世の中に形はなくても「生きてる」と感じるものを、ピュッと感じ取って、それを絵に出せたらいいなと。

タイトル『貝殻は金色のにおい』には「素直に思ったことを出しますよ」という思いも込められたそうですね。

そうそう。なんか、色に匂いなんて無いのかもしれないですけど。でもそんな、みんなが解き明かしたものの以外の解釈が無いわけがない。忘れてるだけ。私は文字とかにも色があるように思うし、感じる力ってそういうことやなと思っていて。例えば思い込みでも、そういった違う感覚を使って感じたものを、絵に描けたらいいなと思います。

鑑賞者の中には、「私にもそう見えていた！」と、ミロコさんの感覚に共鳴する人がいるかもしれませんね。

みんなも無いものとしているだけで、いっぱい能力があると思います。小さい時に感じていても、「何言うてんの」と言われて口に出せへんようになって、忘れてしまっただけとか。それを素直に受け止めて、無視せず「ここに置いとこ」という感じです。



より本質というか、本能に近づいている感じがしますね。これまでファンの方から貰ったコメントで印象的なものはありますか。

絵の印象でワイルドな人と思われているのか、ギャップがすごいあるみたいで。「小さいですね」とかは、よく言われます。あと、「靴履くんですね」とか。そりゃ履きますよ(笑)。ファンの人じゃないけど、知人に「ミロコさんは日本人じゃなくて、地球人だよね」と言われたことがあります。この世界にいる人間だなという感じがして、うれしかったですね。



ご自身でも、自分のことをパワフルだと思いますか？

思いません。すぐ息あがるし。だけど絵がね、そう思わせるのか。もともと体を動かすのが苦手で、体育の授業とかもだいたいついていけてなかったですし。みんなが案外簡単にできることが、私には相当難しいんですよ。そこから、自然と体力は落ちて……。ただ、散歩はめっちゃ好きなので、足腰は強いねと言われたことはあります(笑)。憧れから来世ではダンサーになりたいくらい体力はないですけど、絵からパワーを受け取って貰えたらと思います！

★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】……

淀川かな。家の近くにあったので、なにかあれば淀川に行っていました。遊んだり、花火したり。悩みごとがある時なんかは、わざと最寄り駅から2つ手前の駅で降りて、淀川沿いの河川敷をずっと歩いて帰ってきたり。昔は謎のすすきの藪みたいなのもあって、子供心にちょっと入って怖い目にあってみたいような、あいたくないような感じとか。近くに牛小屋もあったんですよ。雑草を取って来て、ひたすら牛に食べさせていました。みんながくつろいだり、楽器やゴルフの練習をしたりしてる中を、夕陽を見ながら歩いたりするのが好きでした。青春ですよ。

